て、しかも佐倉の中屋敷が隱れ場所、それがため殿中で御大老から直々のお掛合あッたれど、佐倉も大名、知られてオメ〳〵つゝ出しもなるまい、折からの火事、いや、おれは知らぬが、機を衝いた御大老の指圖に、早くもそれと張ッた網、みゝごと掛ッた十七人を其まゝ牢舍拷問に、かはいや腸が乾上ッて脆い哮え面、白狀の書取に最早爪印すンだ、引ッ續いて御公儀より佐倉藩へベタリと來たは外でない、家老田原大角は切腹の上の家名取潰し、いや、こいつ左樣なうて叶はぬ、十七人が面の皮ひンむいた白狀に動きもならぬ釘付だ、また奉行も當夜の不首尾で隱居の申し渡され、しかし呵しう思ふな秀ッ、裁判は片手打でない、火掛りせぬ罪は四十八組より一人づゝの遠島、この治郎も、あすは立派に罪科をいたゞく覺悟」

目を閉ぢて聞き居たる秀五郎は、苦しき息もろとも胸毛を傳ふ冷汗拭うて、

「な、な、何もいはぬ、三日月、面倒ついでだ、や、や、やッてくれ」

「まて、外に尋ねる事がある、此家の婆がためには孫、あの娘ッ子が父の名を知らぬか」

「そ、そ、それだ、三日月の弟分、小車源次と、伯母が餘處ながらの談話を聞いた時の」

「いや源次とばかりでは、まだしも、その源次を殺したは汝だ」

「な、な、なに」

「さわぐな、今さら詮ないが、すぎし夜に田原が邸へ暴れ込ンだ男があらう」

「あ、あ、ある、主人の大角が二日以前に江戸へ出府したとも知

らず空巣を衝きに來た曲者」

「それよ、その曲者が源次だ、見あらはされた死物狂ひ、こッぱ侍を八九人やッつけた横合から、不意に槍玉かけたは慥に相撲あがり、とは汝に相違ない、迚も助からぬ深傷と腹掻き切ッた最後の遺書に委しいわ」

おどろく秀五郎、うけて何をか言はむとせしが、また咳き込む痰に咽喉を衝かれて苦しき聲を絞りあげ、

「ふ、ふ、筆と、紙、取ッてくれッ」

震ふ拳に筆握りて墨も續かぬ掠り書き、治郎は取り上げて笠越しに讀み下せしが、幾度か點頭きて聲を潛め、

「あゝ折角の男も立どころが違ッて憫然に思ふわ、奸計の係蹄が解けかゝッた恐ろし紛れに、使うた人形を欺り寄せ、毒を盛る

は昔から有る手だ、汝も脛腰たゝば田原大角ゆるすまい、この治郎も味方が殺さるゝより却ッて一層の惡み、なれど、今は互に公儀の科條つき、秀ッ、汝も善根ばかり植ゑた男であるまい天だ、命だ、諦めろ」

「そ、そ、さう思ッて居ればこそ、返り忠の訴人にも出ず、恨みを呑ンで犬死するのだッ、み、み、味方は仇となッて、仇にこの心中、察してくれと、賴むッ」

「よし、よし、しかし不思議なは、敵同士が緣を繋ぐ此家の、むむ、この事胸に抑へていふな、いへば返らぬ事に伯母を泣かす道理」

「そ、そ、それよ、たゞ一人の伯母へ十餘年の無沙汰した、ばかりで此の行き違ひ、も、も、もし、其間に首つゝ出して置かば、

あ、あ、あの娘から瓦りをつけて、三日月、汝の腕ともなッたもの、を、を、惜しい事したッ」

「よく云ッてくれた、おれも、源次が隱し女あると、うす〳〵耳にしたなれど、それが此家の娘で、こ、こ、子までであるとは、最期に遺した書付の裏に、行末は養ひ取ッてくれとの賴み書さ、あゝ憫然な奴、今日は一生の名殘に舅の墓詣りかた〳〵、源次が遺子を見に寄ッたに、思はぬ汝に出會ッて、あゝ、不充分なから四方八方の用すンだ」

いひつゝ摺り寄ッて、また一入聲を低め、

「秀ッ、萬々一外から知れては、汝も免れぬ罪科だ、病み惚けた其ざまで見苦しい、今夜の中に刃物使はず死ね、いゝや、それ、雜作ないが、善惡ともに今は治郎の腕なまッた、よいか、これ

で別れる」

旭に向うて露を拂ふ鬼あざみ、敵味方うちとけて、見上ぐる秀五郎、見下す治郎、大編笠をヒラリと振ッて出でむとする障子影に、俄に聞ゆる老婆の泣聲、女の童もおろ〳〵聲に只だ呼ぶは、

「お婆さン〳〵」

春の夜の嵐に散る花は狼藉を極むれど、花の神はなどか忙しかるべき、落ちて流るゝ水は巖に堰かるれど、水の性は自ら閑けし、あはれ恩義の露に身を濡らす治郎吉、けさ黎明の頃より起き出で て、清水くみあげつ頭髮を洗ひ櫛り、あくまで浴湯を果てゝ後、かねて用意の麝香を酒に溶いて五體へ磨り含ませ、衣服を更めて豐に

躬を床柱に寄せながら、扇子を半ば開き小骨を爪彈きして聲低く隆達節を謠ふさま、吹けば馨る袖うごかして、平生よりも眉宇晴れ眼も涼しげに、彩る如き鬚髯のあと青く顏の色さへ清々しう、げに覺悟ある男の心すみて優なり、

時はいつ、享保九年四月二十六日、處は當時の大老職酒井若狹守が庭園の坪、春も過ぎて卯月に近き一天の闇を照らさむと、かけ聯ねたる篝火は昔し鎌倉山の四十八個所も斯くやあらむ、咲き殘る花は落ちて若葉茂れる森の此方、かげを倒に丹花の漣漪をうつ池の鏡も物凄く、こゝ一段の夜露を含む芝生の上、二間四方の假屋を組んで修行門の設け涅槃門の幕さばき、白絹もて卷ける疊に未だ血を滚さ

ねど、物色いとゞ寂びて心ある武人の涙しぼるに堪へたり、

その假屋に對うて十餘間の彼方には、殿作りの局々を明け放ちて廣廣たる武者縁つゞき、庭前の篝火と爭ふ銀燭の光りに見亙せば、主人の若狹は袴の襞積を正して中央に座を占め、客は其の傍に當代の白須甲斐、いま太平の世に一生の見もの老いての物語りと、乞うて詰めたる百餘人の藩士は、肩衣を重ね袖を連ねて左右に居流れつ、げにや前代に聞かず後世にあるまじき晴れ晴れしさに、月夜ならねど塒を迷ひ出でし鳥の羽ばたき冴えて後は、夏まち佗ぶる草葉の蟲も怖ぢて音を得たてず、只をり〳〵の若葉もれくる夜嵐に、碎けて落つる篝火の水に音するも慘なり、

はや時刻來りぬ、壺金の外るゝばかりに、庭門さッと八文字に開かせ、一人の案内者前にたち介添の侍四人を後に從へ、悠然として六

尺に餘る躬を運び出でし三日月治郎吉、庭前の用意と武者縁の晴れとをジロリと眺めて笑みを含み、持ッて生れし身の振りざま、偃蹇り返ッて一歩々々大地に足跡を印けむばかり、作法を守りて無紋水色の上下こそ著けたれ、頭は流石に忘れぬ大額の障子鬢、新たに卷き立てし銀の針線を燃え上る篝火に照らし、小うたに謠ふ蟬折れを天に跳ね返しつ、並み居る縁の正面に近づきて立ッたるまゝに頭を下げ、

「當家の御前、白須の御前、まづ、御機嫌うるはしう」

若狭守は膝すゝませて開きし扇にあふりたて、

「立派々々、見事ぢや、甲斐どの、頭髪の結ひ様が一種の勇みを添へて、なか〳〵奇ぢや、伊達に風流とは是れであらう」

白須甲斐は斜に身を捻りて言葉静に、

「治郎吉、其方は果報者ぢやぞ、御大老へは予から御禮を申し上げ置く、たゞ、日頃の膽を弛めず御目に掛けい、一人の町奴が切腹を斯くまで致さるゝは、一つには其方が性來の潔白を愛せられ、また一つには弓矢の哀れといふものぢや、よく心得たか、いはゞ互に親子二代の見知り合ひ、予は其方を一しほ不憐に思ふの餘り、かゝる晴れの最期を目前に見て嬉しく本懷ぢや」

なに思ひけむ治郎は俄に頭を垂れて仰ぎ見ず、髷の刷毛さき震はせて芝生に落す一雫の涙、

「有難く、心得ます、あゝ今更ながら、さて〳〵御聲の似ませることッ」

滿座しめりて暫し音なし、

稍、ありて若狭守は扇子もて招くが如く、

「許す、そのまゝ近う」

言葉に從ひ治郎は武者緣の端に膝行り上りて庭園を背に坐しぬ、小姓の者が運び出づる銚子盃、主侯はまづ飲んで治郎に與へつ、並み居る家臣を見廻し、

「皆の者、よく見ゆるか、立派の男ぢやの、どう考へても予は惜しく思ふ、甲斐どの、御身よりも盃を取らされい」

あらためて又た白須より受けし後、治郎は懷中の白紙とり出して二つの盃を包み、おし戴いて靜に傍への小姓に預けたるさま、體を捻り目を斜めに見居たる主侯は思はず膝をうツて、

「なか〳〵しをらしい致方を仕をる、天性々々、皆のもの見たか」

治郎は兩手をついて頭を下げ、

「夜陰に時刻うつツては却ツて恐れ入ります」

「まて、まてよ、何なりと望みの品を遣はす、といふ譯にゆかぬな、こりや皆のもの、この治郎を慰め得さする考へは付かぬか、おゝ幸ひ、それ〳〵、近ごろ本國より呼び寄せた琵琶法師がある、最期の送り、其方がために一曲」

治郎は兩手を突きしまゝ頭を擡げてニコリと笑み、

「恐れながら御無理を申し上げます、何卒、同じうは其の琵琶の一曲を、腹かツきりながら聽さたく存じます、冥途に伴ふ音曲の調べ、勿論、介錯人を御免蒙ツて」

おどろく百餘人の藩士が呆れ顏、甲斐は更なり、主侯は左右をジロジロ見廻はしながら、また眼を圓かにして治郎を打守りつ、

「勇ましい奴ぢや、むゝ、それこそ昔し戰國に聞き及ンだ大丈夫の魂ひ、甲斐どの、さて〳〵逞しき性根で御坐るな、うい奴ぢや、

なか〳〵の奴、それ誰かある、かの琵琶法師を呼べ、急げ〳〵」

身には檢校の服を纏うて小姓に手を引かれつ、倭錦の袋に入れし琵琶一面を抱へ、しづ〳〵と歩み來りしは六十餘りの盲人、主侯が指圖の場處に坐して靜に禮を正しぬ、

「檢校、予は若狹である、今夜は平生と違ひ、天晴れ勇者の最期を送る一曲、かまへて心神を凝らせ」

盲人は眉うち顰めて小首を傾け、

「お側の方まで伺ひます、只今、御前の御詞に、勇者が最期を送る一曲とか、されば希代に大切の晴業、時の心は其まゝ音調に移るの古語、せめては、その勇者が人となり姓名を」

家臣の言葉も待たず主侯は稍せきこみ、

「異名は三日月、名は治郎吉といふ前代未聞の男達であるわ、故

あッて只今、屠腹致すのぢや」

「さて〳〵物凄や、しかしまた、我道に取ッては一生一代の調べ、冥加至極に心得ます」

いひつゝ袋の紐といて琵琶とり出すを、先の程より瞬きもせず見詰むる治郎が不審の面相、

「いかゞ致した」

甲斐に聲かけられて氣付きながらも、猶また見詰めて、

「他事に亙ッて恐れ入ります、が、あの檢校は何とやら、見覺えの」

きく盲人は小耳に挾みて、

「さう仰せらるゝは、今夜の勇者で在すかな」

「檢校どの、間違へば御免あれ、むゝ二十五年の昔、日本橋で小

童の兩手を欄干に重ねた田樂ざし」

さくと等しく盲人は見えぬ眼を張りて聲する方に膝を向け、

「な、な、なンと、いはるゝ」

「いや其時のお武家に能く似て居らるゝわ、寄る年波に變りこそすれ、面ざしは昔見たまゝ、しかも左の頰に赤き痣」

盲人は俄に音聲を變へて呆るゝばかりの驚愕、

「梵天八幡、さ、さ、懺悔いたす、その武士で御坐る、して御身は」

「卽ち小柄を貫ひうけた小童、久しぶりの對面に、まづ御無事は何より重疊」

盲人は額に流るゝ汗を拭うて太き息つき、

「御場所がら、憚り御坐れば何事も申さぬ、あの時の怖しさ膽に應へて兩刀なげすて、不幸の眼病に盲目となりしを幸ひ、中年

ながら一心不亂に修行いたした琵琶法師、さても〳〵し、

「いや、この浮世を面白う暮したも、實は賜はッた小柄が原因、怨恨はおろか、御禮申す、また最後を、その人の琵琶に送らるるも深い因緣」

「改めて、そこの勇者に申す、雨夜の城了が技に及ばずとも、この檢校が生血を凍らして彈ずる一曲、試みられよ」

「賴む、檢校どのッ」

滿座呆れて又暫し音なし、

卯月まつ夜の癖なれや、木々の若葉の露を拂ひつ、濕氣を含む風の手は音もせず忍び寄れど、こゝかしこの篝火は一時にさッと色冴えて、物凄くも夜陰を奪ふ假屋のうち、まして二人の介添は葦束に火を點じて左右より中を照らせば、治郎吉が端坐せる樣は鬢の毛の動

ぎも手に取る如く、こなたの武者縁には主侯を始め甲斐その他の人人も、思はず肩を張り拳握りてジリ〳〵と膝おし詰めたり、

治郎は一禮して稍反身となりつ、無紋の肩衣跳ね退けて襟くつろげ、左手を伸ばして前なる短刀、これぞ恩人が形見の藤四郎吉光九寸五分、せめての罪亡ぼしと推し戴きつ、逆に卷き付けたる白布の中際とッて右手に持ち替へ、空三方を後へに廻すと等しく、いくたびか腹なでおろして臍の上通り一寸ばかりの左り坪、

をりしも撥ッて搔き鳴らす琵琶の曲、筧の水の落つるにや、笹葉を傳ふ夜の雨にや、謠ふ唱歌の聲冴えて哀れに凄く聞ゆるは、

武藏野に、草はしな〳〵多けれど、つみなにすれば、偖もすくなし、

治郎は耳をすましてニコリと笑み、篝火に照る尖鋒を思ふ坪にあて

拳に一ゆり込むると見れば、はや白刃の光り半ば沒して迸る血潮を見せじと、左手を添へて刃を指股に挾みつゝ掌もてピタリと切口を抑へ、靜に拔きし吉光を兩眼の間ちかく取上げて、差出す葦束の火に透し眺むる不敵の剛、

武者縁には主侯の若狹守、つと立ち上ッて二歩三歩すゝみ出で、

「切ッたり〳〵、皆の者あれ見よ、子孫に語り傳へて、手本に致せッ」

續いて聞ゆる白須甲斐が聲、

「治郎吉、治郎吉、夜風が吹くぞ」

並み居る百餘人の藩士は感に堪へて、袖すりあはす音のみ聞えたり、

たえては續き、つゞきては絶え、げにや金砂を篩ふ琵琶の低調は、

この時またも一きは冴えて搔き鳴らす手も繁く、謠ふ聲さへ朗かにすみて、

思ひたち、いづる三日月ながむれば、はや山の端に木がくれて、
かすみそめたる大空や、

治郎は刃の血糊を嘗め取ッて、鬢の毛に刃互り三四度サラ〳〵と引き、流石に今は震ふ拳ながらも見事切口へ探り入れ、半ば俯しつゝ横一文字に右へ引まはしつ、息ふかじと齒の根のたゝむばかりに脣を結び、拔いて返す尖鋒を過たず咽喉三寸、

焚き聯ねたる篝火も今は漸く影を潛めて、夜風冷かに濕り互るは庭園の青葉のみかは、朧に包む陰氣に閉ぢられて、細くたえ〳〵に哀れを引く檢校が聲、

春さり秋は蟬の聲とても、はかなき憂きを引きよせて、結べば

草の庵にて、とくればもとの野原なり、とくればもとの野原なり、

『ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野に、誰がぬぎかけし藤袴ぞや』元文四年の秋の頃、かの大塚村なる美人茶屋のあと、翠かはらぬ松の小影に小なかる竹行燈かけて、『みかづきのかげ』といへる七文字を認し、茶の料は取らで人の憩ふに任する家居あり、源氏の君が白く哀れといひし籬根の夕顔を越して、をり〳〵見ゆる主人の女房は年のころ四十路に上れども、憎や昔の色香うせで袖の餘波も床しげなり、水の流れや行く人の他生の緣を引きとめて、世渡りならぬ朝な夕なに茶を汲むは、萩か尾花か今一入の色盛り、二十の上に指をりかぬるぞ恨みなれ、

大塚村美人茶屋の遺物

黒染の法衣こそ纏はねど、心は髪と共に世をふりきり、いはば英雄さツて仙を學ぶの意趣、伊達の氣儘に育ちし肌やせて、今この一つ家を秋香庵と名づけしも、思へば菊といひし浮世の餘波、つながる緣の美人を蝶と呼ぶも哀れなり、そが庵室に掛けたる一軸は、かの治郎吉が春の宵の酒さげんに、節くれだちし腕まくりて螺の如き手に筆にぎり、

「やい皆の奴、三日月が心は斯うだ、這ひ寄ツて見ろッ」

滿座の分子を驚かしたる筆の跡、もとより能書ならねど墨痕をどりて紙を拔き出でむとす、

借用申す和歌の事

いささらば茂り生ひたるとがの木の
とが〳〵しきをたて〻過ごさむ

今より見れば實に幼稚なるものなり、この幼稚なる『三日月』を壯絶快絶として沸くが如くに迎へ、また突然と現はれたる浪六の何物たるを怪しみ、世間その本名の知れざるに騷ぎしが如きは『三日月』の幼稚なるよりも更に幼稚なりし一證といふべし、

報知叢話は日曜毎に發せしため『三日月』の第二回目に當りし時、書肆春陽堂の主人和田篤太郎、報知社に來りて浪六先生に拜謁せむ事を乞ふ、我こに忽ち先生となり拜謁を乞はる、小說家の先生たる實に容易なる哉、

始めて春陽堂に會ひ、その來意を聞きしに、『三日月』出版の前約を乞ひ、さらに原稿料を問ひしが、當時の我いまだ小說の原稿料なるものを知らず、

笑うて曰く、そも〳〵今日の小說家中その第一に最も高價なるは誰にして幾何ぞと、春陽堂その二三の例を擧ぐ、我さらに曰く、原稿料を取らざれば取らざれど、取れば第一の高價に三倍を取るべし、ページ數の如き我の關するところにあらずと、春陽堂この一言に聊か辟易して去りしが、『三日月』の第四回目に再び來りて、三倍の原稿料を拂はむとす、我また笑うて、二回目は三倍なれど四回目の今は六倍なり、七回目を十倍とし十回目に至れば二十倍なりと、これを聞いて彼の惘れ返りし時、我その肩を叩いて、實は戯れしのみ、たとひ百回に及ぶも三倍にて可なり、もし我に金があれば無代で遣るべしと、

春陽堂また製本の體裁に苦しみ表紙口繪の用意を急いで、當時まづ有名の畫工を列擧す、我は曰く、面倒なり、一切他人を學ぶに及ばず、ついでに表紙も口繪も描いてやるべしと、蓋し菊版を絹絲に綴ぢて表紙繪を裏より

表へ廻し口繪を袋張とせしは『三日月』に始まり、その以後の小說出版また多くは之を倣ふ、

春陽堂の主人、後に語りしは、隨分これまで巧みに諸先生を綾なしましたが、貴方には始めから喝かされて、おまけに咬へて振られましたと笑へり、

この春陽堂は當時の書肆中、面白き男にして、加之も小說を盛ならしめし點に著者以外の力を盡せし功あり、

『三日月』の一回を以て、我は片隅に押し寄せられし校正の席より離れ、漸く家の中央に出でしが、給仕も小使も俄に敬意を表し、編輯局よりは掘出物の如くに迎へらる、思軒居士また改めて月給の內相談ありしが、なほ『三日月』の一篇に筆を絕たむとせし當時の我、これを辭して受けず、

春陽堂より其ころの原稿料としては殆ど他に比例なき金を得しがため、まづ花屋の物置を這ひ出でゝ同じ元町の大津屋といへる料理屋の裏に三室の隱居所ありしを幸ひ、これを借りて久平と稱せし男を炊事兼用の家僕に傭ひ、始めて自己の巢を作れり、

最後の惡太郎

十一月二十五日の午後、報知社の小使一書を携へ來りていふ、先刻、不意に壯士數人の襲擊あり、亂暴狼藉いたらざるなく社中を震駭せしめて去れりと、その書は思軒居士より我に今夜の外出なきを乞ひしものなり、

夜に入りし後、竊に訪ひ來りて曰く、青年義團の壯士また明日來襲すべきを揚言し、明日もし思軒を出さざれば更に大に爲すところあらむといへり、事は我より起る、これを奈何せむと、殆ど色を失へり、

蓋し青年義團は當時の最も猛烈なる壯士團にして、事ある毎に必ず決死決死と叫びしが、板垣退助翁の演說場に暴れ込みし事件ありしを、思軒居士これに『馬鹿者の素性』と題して記載せしがため、思軒を殺さざれば已まざるべしと聲言せり、また思軒居士は學識文章ともに完全せる一代の豪なれど、地震と壯士に向うては實に見るも氣の毒なる臆病の人なり、加之も我ためには落魄の極に食を求めし恩人こゝに窮す、起たざるべからず、これを慰めて曰く、乞ふ安んぜよ、我ありと、

其ころの我は多く家にありて、一週間に二三度たゞ客員の如く出でしのみ、されど翌二十六日は朝より出社して、竊に決するところあり、受附に命じ

ていふ、壯士もし來れば他に通ぜず我に告げよと、

果して其日の午後二時過ぎ、森田思軒に面會を求め來れる壯士あり、受附これに驚いて編輯局へ通ずるや、いづれも顔を見合して曰く、數人來襲の翌日たゞ一人にて來れるもの、その大膽と決心とは尋常の敵にあらずと、我は笑うて曰く、寧ろ面白し、聊か骨あるに似たり、思軒居士の名代として、衆を要せず、敵一人ならば我また一人これに當らむ、宜しく三階の頂上に導くべしと、

我その日は思軒居士の出社を止めて家にあらしむ、

當時この報知社に三階建の倉庫造作ありて、これを應接所とせしが、多くは最下の一室と二階に止め、その三階は常に殆ど用ひず、加之も梯子は細く急なるがため綱を引いて上り、室は狹くして袋の如し、我この袋の中に敵を入れて遁路を絶ち、人を交へず一騎打の勝負を決せむとす、敢て自ら

冒險を誇りしにあらず、實は我に壯士二三人を危險とせざる自信力あればなり、されど過去の我を知らざる社員いづれも大に危む、危みしは當然にして我は五尺二寸の小男、來れる壯士は六尺に近しといふ、

三階に上れば、果して壯士たるに最も遺憾なき容貌骨格を備へし大男なり、丸きテーブルを夾み椅子によりて相向ふ、彼まづ曰く、森田思軒なりやと、我いふ思軒の名代なり、君は青年義團の名代として來る、我また思軒の名代として接す、もし青年義團を擧げて來らば思軒を出すべしと、語いまだ終らざるに彼の右手は懷中に入れり、入るや否、間一髪の我は前なる煙草盆の火入を取ッて面上に拋ち、灰神樂を浴びて目を失へる敵の横合により直に組んで捻ぢ合ひしが、實は容貌以上の恐るべき大力を有せり、

凡そ我に組まれて襟に手の觸るゝや否、十中の八九、いかなるものも落すべき自信ありしが、この敵のみは意外の强力に多少の業ありしがため、殆

ど十分あまり奮闘の結果、竟に已むを得ずして最後の一撃を加へたり、

最後の一撃とは、家を出づる時、花屋の阿爺より昔の十手を借りて竊に懐中へ忍ばせ、我これを用ふる時は敵を殺す時なりと覺悟せしに、組み合うて轉びし際、彼の懐中より短刀を落せしがため、その一刹那に猛然たる我、もはや容赦なく敵の頭上を打ち割れり、恰も墓を踏み潰せしが如く、ぎやッと叫びて倒る、

蓋し敵は第一發に不意の火入を投げられし時、その火入の割れしと共に額を破りしのみならず、灰神樂を浴びて目鼻を失ひし横合より直に組まれしがため、竟に短刀を拔くべき遑なく、始めの談判中に右手を懐中へ入れしも、また此短刀にありしが、後に思へば、いはゆる壯士の慣用手段として、たゞ威喝の具に止りしやも知るべからず、

されど我は威喝手段にあらず、もはや最後の一撃を用ひ、その頭蓋骨を叩

き割りし筈なりしに、手の狂ひしか彼の避けしか、聊か左に辷りて二寸三分の深き裂傷なりしとは、これを縫ひし警察醫の言なり、但し現在その時は頭上より瀧の如く滿面の血を浴び、加之も氣絶せり、

氣絶せしを引き摺りて三階の梯子段より二階に蹴落し、また二階より最下の一室に蹴落すや否、俄に蘇生して夢中に荒れ廻りしが、多數の活版職工に取圍まれて再び倒れたり、

捻ぢ合ひし跡を見れば、丸テーブルの眞棒は折れ、一脚の椅子は碎け、ガラス窓は三個所を破り、いかにせしか三尺以上に揭げし姿見の大鏡は微塵となれり、また我は其椅子に打たれしため左の半面に紫色を帶びて膨れ上りしのみ、血は悉く敵の血なり、

壯士は戸板に載せられて、現今と同じ久松町の警察署に運ばれ、我は俥に乘りて行きしが、夜の八時ごろに取調の結果、竟に彼は短刀の證據物件と

共に留められ、我は正當防禦として直に放たる、放たるゝ時、警部は我に向うて、あれは有名な奴ですせ、よく遣れましたなと、

警察署を出でしは九時ごろ、青年義團の壯士これを道に要せりとて、報知社より多數の職工と警察より三名の巡査を附せられしが、悉く辭して俥を命じ、其まゝ元町の家に歸れり、翌朝の他新聞を見れば、いづれも壯士は殺されたりと報ず、

この壯士は野上慶定と稱して、青年義團中に聞えたる頭目なりしが、その頭目を半死半生とせられ加之も監獄へ投ぜられしがため、日夜間斷なく頻りに我を覘ふの風聞あり、我また多少の警戒するところありしが、後に聞けば寧ろ案外の滑稽にして、『三日月』の著者と知りし以來、我を乞うて青年義團の團長に仰がむとするの相談ありしと、

さらに奇なるは、我の臺灣に往來せし頃、その成功者中に内田孝太郎なる

ものありしが、この内田の數年以前に我を訪ひ來りし時、語りて云ふ、先生のため報知新聞の三階にて半殺しにせられしものは、今日の我女壻なりと、當年の壯士、今は短刀を振り廻さずして金を振り廻すと聞く、人間の變化また面白からずや、

報知社のためには壯士を防ぐ役目にあらざれど、一時の食を求めし思軒居士のため、實は久しく自ら押へし最後の惡太郎を演ぜしのみ、十一月二十六日のこの日を以て我は心に再び惡太郎たらざるを誓ふ。

その十二月二十三日、報知社を退く、思軒居士は固より他の社員また頻りに引き止めしが、小説家を目的とせざる我、強ひて去れり、

幸ひ『三日月』の原稿料いまだ盡きず、十二月二十九日、母に罪を謝せむ

がため國に歸りしが、東海道の汽車全通以來こゝに三年、我は始めて乘客となれり、されど慘憺たる十月の尾濃震災に鐵路の破壞いまだ復舊せずして歩まざるを得ず、たま〳〵全通の汽車に乘りて全通し得ざる我は、我の運命いまだ斯の如しと思へり、

郷里の小康

明治二十四年こゝに盡きむとする除夜の薄暮、郷里に入る、

端書一枚の通知なくして、突然こゝに歸り來りし我を見るや、母は只その無事を喜びて、泣き給へり、

されど後に聞けば、たゞ無事を喜び給ひしにあらずして、この二三年いづこに何をせしか殆ど消息の絶えし我名を、始めて『三日月』に見給ひしがためなりといふ、

一人の母にも我志ならざる一部の小説を以て、不孝の罪を重ねざりしとすれば、他人の我を以て尺蠖の伸びしが如くに思ひしは、世間普通の思慮なるべし、さらに不用意なる急作の『三日月』が案外の廣く行はれしに驚けり、

筆を執るには強ち東京に限らざるべし、また久しく逢はざりし故郷の春に幼馴染の花も見るべしと、母の慰め給ひし言葉を思へば、今日まで四方に漂浪せし我を以て、この小説家たらむがための苦勞なりしと許し給へるが

如し、

『三日月』一冊に筆を絶たむとせし我、引き止められし報知社を強ひて去りし我、この母が言葉に動かされしのみか、現在の境遇、その母を慰めむとするに、猶いまだ他の一事を現はし得ざりしがため、一月の中旬より四月までの間、母の膝下にありて、昔の我に返りし傍、筆を執りしは『奴の小萬』

その原稿を母に讀んで聞かせまゐらせ、母の喜び給ふ顔を見て、我は人の知らざる一種の不運に纏はれしものと思へり、

我この郷里にありて『奴の小萬』に筆を執りし後、いよ〳〵人間の運命なるものに深く感じ、いはゆる隨感隨筆の運命論を艸せしが、遙の後、これ

を或一部中の一節として世に出せり、

昔より今に至るまで、絶えず常に其正體を捉へむとして、いまだ曾て捉へ得ざるものは運命なり、

その正體を捉へ得ざるのみか、いまだ曾て其正體を見屆けしものさへなし、

運命それ化物なるか、

由來この運命に對する講義と解釋とは種々あれど、その講義と解釋とは實際上さらに何の功なく、やはり運命に弄せられ運命に支配せらる、

萬事その場の運次第、もはや成行の運命に任すのみ、天なり命なり、運命なれば致方なし是非なし、運のないものと諦めるより外なしとは、皆これ人間の運命に降參せる證據なり、あまり心外千萬に殘念な

らずや、
何とかして運命を引ッ捕へ運命を叩き倒し運命を捻ぢ伏せ運命を組み敷き運命の咽喉笛を締め付けて、二度と再び我々人間を馬鹿にせざるやう、第一は此奴のために無念の涙を呑んで往生せし幾萬人の恨みを報じ敵を取ッてやりたし、
されど運命の奴、ぺろりと舌を出して曰く、人間どもの手に終へて堪るものかと、
そも〳〵運命は迚も人間の手に終へざるか、もし人間の手に終へざるものとすれば、人間この運命に對して如何なる態度を保つべきや、
思へば思へば癪に觸る奴なり、考ふれば考へるほど腹の立つ奴なり、
されど癪に觸へて向へば猶更ら面白がりて人を馬鹿にし、腹を立てゝ向へば益々その大口を開いて人を笑ふ、

この上は癪に觸へず腹も立てず、もはや敵とならずして味方となり、
運命に抗するよりも運命に愛せられむとすれど、運命の奴また頗る得手勝手に人間を選り好みして、味方するがために誰彼なしに愛するといふ溫順しき奴にあらず、
敵しては迚も叶はず、味方となりても愛せられず、人間いよ〳〵策に盡きたり、策に盡きたるところ運命にいへば、やはり運命に弄ばれしものなり、
運命、運命、人間これを左右し能はざれば、せめて運命の神なりとも見屆けたし、
或は思ふ、運命は人間を離れて運命あるべからず、運命は人間の外にありて人間を支配すべきものにあらず、人間の世に處し事を行ふ時、
その勢ひに乘じて進むところ、これ卽ち運命のあるところにして、運

命これ機會なるか、

運命の神は後頭に禿げて毛髪なしとは、一たび去りて引き戻し難く、その機會を失へば再び來らざるをいふ、

時を得れば鼠も虎となり、時を得ざれば虎も鼠となるの語、機會に乘ずるもの天下の英雄となり、機會を失ふもの陋巷に窮死するが如きをいふ、

されど人力を盡せば必ず運命の來るべきものにあらず、人力を盡して天を待つとは、人力を盡して運命の支配に任すといふの意味にして、この點より見れば、運命また人間を離れて人間の外より人間を左右するが如し、

さらに同じ道を歩みて物を落すものと拾ふものあるは、落すものゝ前後に歩むがためなりといへど、その前後に歩むは既に運命なり、同じ

力を以て同じ事に當れど、成るものと成らざるものゝあるは、世間の事實上に於て猶更ら運命の人力以外にあるを知るべし、

一面より見れば、運命これ人間の力にあるが如く、一面より見れば、運命これ人間の外にあるが如く、そも〳〵いづれを運命の居處と定むべきや、

また更に或點より見れば、いかなる人間も運命を取外すものなく、運命は敢て人間を咒へるものにあらず、寧ろ運命は必ず人間に幸すべきものにして、只その幸を授受する間に分量の相違あるのみ、

靜に人間の生涯を顧みれば、誰か一度の全盛期なかるべき、我は不幸に生れたりといへど、その不幸中に最も不幸の薄く淺かりし時は卽ち其人の全盛期なり、あれほど働いたが三萬圓以上を得た事なしといふ、その三萬圓その人の頂上點なり、多年これほど惡戰苦鬪し來りて僅に

一家を支へしは不足にあらず、寧ろ幸運の最極點なり、

不幸も不運も他人に比較せる不幸不運にして、他人に比較すれば大小深淺の差ありと雖も、自己たゞ一人こゝに自己の生涯を見れば、いづれか一度は必ず運命に幸せられしものなり、

常に飢ゑたる乞食さへ、生涯に五六度は貰ひ過ぎて腹鼓を打ち、また食ひ餘りて捨て場に困るほどの時ありといふ、彼等にも運命は得意を禁せず快樂を奪はず、呵しき事あり娛しき事あり戀もあり情もありて、いはゆる乞食も身祝ひの語は、たしかに目出たき事のあるべき證據なり、

この理より見れば運命これ幸福にして何人にも漏らさず與ふれど、只その幸福は人間の程度に應じて深淺あるのみ、分配の深淺大小は運命にあらず、運命の寄與は既に濟みて、これを取る人力の奈何にありと

いふべし、

かくの如く詮じ來れば、運命また恐るゝに足らず、運命また驚くに足らず、運命は人間の力量次第なり、

されどまた或點より見れば、運命の神これ惡魔の神なり、いかなる人間にも襲ひ來りて號泣せしめ、いかなるところにも攻め寄せ來りて、その全體を碎き得ざれば必ず一角を碎き去る、

金力と勢力とに滿てる富貴の家には、金力と勢力とに防がれざる病弱と夭折との外さらに思はぬ不意の禍あり、智力と勇力とに滿てるものは、その智と勇との及ばざるところに乘せられて夢にも知らざる意外の禍あり、人間の最も尊きもの身を殺して仁を成すといへど、身を殺さずして仁を成すの全きに達せしめず、義のために盡せど義のために酬いられず、善人その生涯を地獄の如くに苦しめらるゝものあり、公

明正大の人その生涯を闇黒に葬らるゝものあり、火難、水難、病難、盜難、その他に於ける總ての難は、決して人間の不用意と不注意のみにあらず、これに逢ふと逢はざるものゝあるは爭ふべからざる事實にして、その事實を運命の業とすれば、凡そ人間の災厄は悉く運命の業といふべし、

この理より推せば、人間の不可抗力に禍せらるゝもの、乃至また善因善果の反對を生ずるもの、總て運命これ惡魔の飜弄に似たり、

さらに運命の文字、その運の字は、はこぶ、うつる、うごく、めぐる、ゆく、以上いづれも停止せざる意味にして、これを人間の力とすれば、はこび、うつし、うごかし、めぐらすの意味となれど、命の一字これを人間の命ずるまゝになるものと解釋するは、あまり不用意に勝手すぎたり、たゞ命これ從ふの意にして、命は天なり、いはゆる宿命なり、人間その

人間以外に於ける天に從ひ命に從はしめらるゝこと多し、

最も簡單にして立證の明白なる實例は、火災保險に數年來の保險料を一度も滯らず正直に拂ひ込みしもの、餘儀なき要用のため一朝その掛金を怠りし日に忽ち丸燒となりしものあり、いろ〳〵に勸誘されし後、いや〳〵ながら義理に迫りて已むを得ず契約せしが、契約の調印いまだ乾かざるに燒けて保險料の丸取せしものあり、卑近なれど此實例は人間あらゆる方面に亙りて人間あらゆる方面に免るべからず、

運の弱きものは最も強かるべきところに却ッて弱く破壞せられ、運の強きものは最も弱かるべきところに却ッて強く意外の幸福あり、

惡運の強きものに神も祟らずといへる諺は、善人も智者も運命の弱きもの自由自在に飜弄せらるゝ意味なり、

首尾よく難關を切りぬけて誇れるもの、人に過ぎたる力量者のみにあ

らず、試驗に及第せしもの必ずしも優等の學生にあらず、試驗に落第するもの必ずしも劣等の學生にあらず、同じ池に釣を垂れて大魚を獲るものと小魚を得るものと一切さらに終日の獲物なきものとあり、氏なくして玉の輿に乘るもの豈それ美人のみならむや、

富に生れ貧に生れ貴き家に生れ賤しき家に生るゝもの、その生るゝに於て、既に餘儀なき運命なり、その生るゝ時より既に餘儀なき運命を擔うて來る、死して名を遺し功を稱せらるゝもの、亦これ運と不運あり、その生と死の間に活動せる人間の一代に運命の大小厚薄なかるべきや、

また同じ運命の強きものも、一時に得るものと永久に得るものとの差あり、つまり生涯一度の總勘定に渡さるゝものと年割月割日割の分割的に渡さるゝものとあり、

生涯一度の總勘定に渡さるゝものは、生涯の苦勞を一時に取り返して、我も世間も意外の幸に驚き驚かるゝもの、これを分割的に渡さるゝものは、人を驚かし一時に盛ならざるも、ふしぎに衰へずして常に絶えず窮せざるものなり、

さらに最も運命の強きものは、二重の好運を一時に併せ得て、重ね重ねの幸福に逢ひ、さらに最も運命の弱きものは、二重の不運を一時に背負ひ込んで重ね重ねの災難に逢ふ、笑うた顏を牡丹餅で叩かれるもの、泣面を蜂に螫さるゝもの、とン〳〵拍子に善くなるもの、とン拍子に惡くなるもの、いづれも皆これなり、

結局、運命は人間の外にあり、

結局、運命は人間の自由自在ならざるものなり、

人間の奮鬪心を消磨せしめざるがため、いかに運命を度外視せむとす

るも、人間の進歩力を弛緩ならしめざるがため、いかに運命を無用視せむとするも、結局、運命の人力に及ばざるは餘儀なき事實上これを爭ふべからず、

もし運命を大なる高さところより見れば、わざと人間に與へられし不可解の難問題にして、この問題を解決せしめむがために人間の努力を呼び人間の進歩を招くところ卽ち是れ運命の目的なるが如し、

いづれにせよ、現在の事實は、この運命なるもの、人間以外より來れる何物かの分配法なり、

人間の分配法ならば人間これに向うて爭ふべきも、人間以外より來れる分配法を奈何せむ、その分配法に不平不滿あらば、宗教上に濟度され道德上に慰安を求むべし、

結局、運命は人間の外にあるがため、人間これと戰はざれば我に對す

る運命の力を知るべからず、結局、運命は人間の自由ならざるがため、その自由ならざるところに、寧ろ勇を鼓して戰ふの價値ありといふべし、

宗教上にも濟度を求めず道德上にも慰安を求めず、これに向うて戰ふの勇氣もなく決心もなくして、たゞ徒らに空しく運命の餌食となり運命の犧牲物となるが如きものは、自己の生涯を大道の賣卜者に託して充分なり、自己の生涯を加持祈禱の行者に託しても可なり、

わかりきッたる事よりも、どうなるか、わからぬ運命に向うて奮勵一番、やれるだけ遣ッて見るも、亦これ寧ろ人間の痛快事ならずや、

つまり運命を人間の痛快事として、これに泣かず、これに驚かず、これに屈せず、たとひ叶はざるものと見るも、遁げ出せば却ッて追はるべく、いよ〳〵叶はぬといふ間際まで、多少はヤケ氣味を以て進

むべし、どうせ叶はぬ以上、もはや捨鉢に奮闘するも、亦これ面白からずや、地獄門前桃李春、

東京朝日新聞

四月上旬、暫く母の膝下にありて東上し、久平に守らせし本所元町の家に歸りしが、故郷に筆を執りし『奴の小萬』また春陽堂の出版として、再び世間より豫期せざる案外の歡呼に迎へられ、いよ〳〵我は人の知らざる一種の不運に深く纏はれたり、

春陽堂その他の書肆いよ〳〵爭うて新著を迫りしが、境遇の堪へ得らるゝ

限り文筆の徒たるを避けむとせし我、遁るゝが如く都門を去ッて、五月に房總の海岸を巡り、六月、鎌倉を經て金澤に入り、さらに前途の方針を定めむと吾妻屋に滯在せし時、東京朝日新聞の村山社長より特使を以て追はれ、この吾妻屋に捉へらる、捉へらるゝは我一家言にして、他より見たるところ、實は厚き禮を以て迎へらる、

その口上に曰く、たゞ君を迎へむがために來れるのみ、願はくは社長に面して諾否を與へよと、この一言は坐して受くべからず、相伴うて東京に歸り、始めて村山社長に逢ひしが、頗る包容の大なる人にして、我を待つに殆ど前例なき厚遇を以てし、我いふところは悉く用ひられ、竟に我をして辭する能はざらしむ、

我その時に云ふ、誤ッて世に知られし浪六の名を取るは、朝日新聞として輕きに似たり、我また怪我の功名に祿を貪るの不快あり、もし小說家たら

ば改めて朝日新聞の小説家たるべしと、ために入社第一の『鬼奴』を掲げし時は浪六の名を用ひず、殊更に無名氏として掲載せり、無名氏の『鬼奴』を掲げし後、始めて次の小説より浪六の名を用ふ、

さらに我の約せしところ、月々の給料を取るも筆を執るは隨意にして一年に三回以下とし、もし病に臥せば二年間を養はるべしと、今日より思へば實に傍若無人の我なりしが、村山社長これを容るゝの雅量あり、

我は竟に小説家となれり、そも〳〵小説家となりしは、思軒居士その第一を過らしめ、春陽堂その第二を過らしめ、朝日新聞その第三を過らしむ、さらに以上を總括すれば、かくの如き小説家を迎へし世間これを過らしむ、

されど罪を他に嫁せずして自己を責むれば、その第一は英雄の卵子となり損ね、第二は念を官途に斷ち、第三は政治家となる道行に彷徨き、第四は實業家となる階梯を踏み外し、第五は殆ど名狀すべからざる艱難辛苦の苦勞人となりて空しく苦勞の效果を取り遁し、第六は落魄窮境の底に至りて已むを得ず筆を執りしもの、已むを得ずといへど、もし世の中に小説家といふ一種の容易き休憩所なくんば、竟に我は如何なるところに走れるやも知るべからず、

明治二十五年より二十九年に至るまで凡そ五個年、朝日新聞社の祿を食み朝日新聞社の社員たりしが、その五個年間いまだ曾て一度も朝日新聞社に出入せし事なく、我顏を知りしは村山社長と木村會計主任と原稿催促に來

りし人とのみ、また小説家となりて今日に至るまで殆ど二十餘年間いまだ曾て他の小説家と交りし事なく、我顔を知れるは死せし紅葉と露伴と水蔭と其他の一二人のみ、

新聞社員として五年間その新聞社に出入せざる不利益は我これを知れり、或は人よりも多く之を知れり、小説家として二十餘年間その小説家と交らざる不利益に至りては、さらに我その不利益の最も多きを知れり、知りて出入せざりしは敢て不遜を逞しうせしにあらず、知りて交らざるは敢て傲慢の意あるにあらず、また交際の面倒なるにもあらず、たゞ我に今なほ一の斷念すべからざるものありて、常に絶えず文士たるの境遇を背後より叩き出さむとするがためなり、睡れる枕頭に喝して曰く、一時の休憩所としては餘りに長からずやと、

朝日新聞社より常祿を得し後、向島の松壽園に暫く身を置き、その八月、白髯の森影に家を構へ、始めて母を故郷より迎ふ、

この向島より根岸の今日に至るまで凡そ二十年、その間に於ける我は、依然として一貫せる小説家なれど、實は寧ろ過去の三十年間よりも、更に人生の變化を極めし曲折波瀾の多きものあり、その小説家たる名の下に隱れて外面の露骨に現はれざりしがため、却ッて深酷たる一種の裏面史を加ふ、これを『我五十年』の後編とし、明治二十八年、滿三十歳の我を以て前編とす、

三十年、顧みれば一夢の如し、

もし我をして心に誇るべき成功者の一人たらしめば、小説家として小説に

筆を執るが如く、また自由自在に自己の歴史を飾るべきも、過去三十年の間に於ける我は失敗の足跡にして、殆ど懺悔録に等しく一句一點さらに虚妄の文字なし、寧ろ赤裸々の身を以て我子孫の戒めに遺し、併せて今日の青年諸子に前車の覆りし痕を見せしめむとす、

我五十年 終

大正三年十二月一日印刷
大正三年十二月五日發行

我五十年奥付

著者 村上信

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

發行者 加島虎吉

東京市京橋區日吉町十番地

印刷者 渡邊爲藏

印刷所 民友社

不許複製

(定價金壹圓五拾錢)

發兌

東京市日本橋區本石町三丁目 電話本局長三六六六番 二一六七番 振替口座東京一七四四番 至誠堂書店

東京市日本橋區人形町通住吉町 電話浅花一九四九番 振替口座東京一九八四二番 至誠堂小賣部

歡迎如湧

縮刷 浪六全集

新式ポイント活字印刷
袖珍特製天金箱入美本
◉第一編 ◉第二編
◉第三編 ◉第六編
◉第七編 各冊
定價 壹圓三拾錢

各編收むる所悉く是れ浪六先生が傑作中の傑作として天下の讀書界を風靡したる者裝幀の美は机上を飾るべし携帶の便は旅行に伴ふべし幾回是を讀むも飽く事を知らざるべし内容の豐富と價格の至廉亦他に比類なかるべし

◉第四編 ◉第五編
◉第八編 各冊
定價 壹圓拾錢
郵税各冊金八錢
印刷鮮明携帶至便

第一編目次
當世五人男
同後編
黑田健次
同後編
同續編
最後の黑田健次
同後編

第二編目次
上田力
同後編
同續編
倉橋幸藏
同後編
同續編

第三編目次
川上三吉
同後編
同續編
吉田雄藏
花車
しなさだめ

第五編
八軒長屋
後編

第六編目次
鬼あざみ
やまと心
日本武士
金剛盤
同後編

第七編目次
最後の岡崎俊平
同後編
魚屋左衛門
呂助宋左衛門
古賀市助
武士氣質

第八編
學問人間
居家處世
うきよの裏表
正編 續編

第四編
八軒長屋
前編

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局三六六七 振替東京一七四四番

浪六先生著

口繪實況寫眞コロタイプ
◉男女の戰ひ
菊判美裝紙數三百頁
定價金九十五錢 郵税金八錢

口繪コロタイプ版
◉男女の戰ひ 續篇
菊判美裝紙數三百頁
定價金九十五錢 郵税金八錢

口繪 北澤樂天畫伯
◉黑雲
菊判美裝紙數三百頁
定價金九十五錢 郵税金八錢

口繪 清方畫伯 木版廿五度刷
◉雪達摩
菊判美裝紙數三百六十頁
定價金壹圓二十錢 郵税金廿二錢

誠實の和睦は戰ひの後にあり神聖の戀愛は男女衝突の後に生ず

男女あらゆる階級の衝突
男女あらゆる思想の衝突
是れを讀まざるもの今日の男女にあらず、

社會あらゆる階級を網羅せし男女の戰ひ、
いよ〳〵白兵戰に入る、男女兩性を赤裸々に剝き出したる人生の裏面史なり、

讀賣新聞曰く、本篇のヒーロインは所謂、嚊天下の標本である。……細君の鼻息を伺ふ牧野貞一の心中の不憫さ、可笑さを、見るに見兼れた嘉落豪放の田村剛三、竹馬の友の誼を思ひやり、自ら進んで家庭の離局に當り、彼の好妻を叩き出し、更に酸いも甘いも嘗め盡した藝者を、二度の妻に取持つて、牧野の悲戀病を救ふと云ふ所で、局を結んで居る。蓋し浪六氏の小說は、强と弱と魂と美とのコントラストが巧に描かれてゐる所に經大の興味がある

『この首、伊達には所持いたさず候、入用次第賣渡し申候、但し天下取りの猿面冠者に限る』と啖き出せし快男子が面目は、浪六先生獨得の痛快なる筆によりて遺憾なく現はされたり、正に是れ小說よりも奇なる事實譯、歷史よりも趣味深き戰國時代の裏面史なり。

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局三六六七 振替東京一七四四番

最新刊

大町桂月先生著

桂月文選

天下苟くも文字を知れる人にして知らざるは無き文豪大町桂月先生、時流に高く一頭地を拔いて文壇に闊歩すること既に廿餘年、文を作す數千萬章、著者等身も啻ならず。今や先生自ら其中より最も會心の傑作一百四十餘篇を拔きて、紀行・敍事・抒情・議論・書簡・雜の六門に分つ。先生が半生の心血この一書に凝れり。絢爛花の如きあり凛烈秋霜の如きあり。豪放に洒脫に雍容に悲壯に、剛柔を兼ね諸體を包含し、筆力縱横氣韻躍動、實に一代の壯觀を極む。大正の文壇本書出でて始めて光彩を生ず。天下好文の士、請ふ速に一本を座右に具へ給へ。

袖珍特製天金
箱入美製全一冊
定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢

大町桂月先生著

少年文學 日本人の弓矢

▲口繪及挿畫寫眞版木版數十葉

四六判上製美本
定價金六拾錢
郵稅金八錢

歐洲の列强今や干戈を執つて起てり。我日本亦之に加はり、而して米國之に加はらば、やがて全世界の戰爭とならむとす。日本國民の犢鼻褌締めて掛るべきは、實に今日に在り。朝には大隈伯若返つて首相となれるあり、野には天下一品の文豪、青年指導の泰斗、大町桂月先生亦若返つて此著あり至誠天地を動かし、壯烈鬼神を泣かしむ。文章は平易なる言文一致體なるが、先生の筆往くとして可ならざるなく、日本男兒の粹なる大町先生、日本人の特色を發揮して餘蘊なし。滿天下少年の好讀物として最適絶妙の快著なり。歐洲の風雲を睥睨する豪傑兒をして血躍り骨鳴らしめむ。

東京日々新聞記者 **松内冷洋先生著**

世界大戰史

▲口繪戰局地圖及寫眞版挿畫數十葉

菊判美本全一冊
定價金八拾五錢
郵稅金八錢

世界大戰亂の好說明者

世界未曾有の歐洲大戰亂は何故に起つたか、對戰國は如何に雌雄を決せんとするか、其複雜な關係を、最も分り易く、最も面白く、最も通俗的に書いたのが本書である。興味と理解の兩方面から、この未曾有の大戰亂を說いたもの實に天下たゞ本書あるのみ。家庭戰爭談に、社交戰爭談になくてならぬ好說明者である。東洋の覇權を掌握し、全世界に雄飛せんとする我國民は、是非一讀せらるべし。

發兌 至誠堂
東京日本橋區石町三丁目
電話振替局長東京三一六七六四六六四番

大正名著文庫

法學博士 和田垣謙三先生著 ▲挿畫 川村清雄畫伯三色版二葉 齋藤松洲畫伯木版三葉

第壹編

兎 薯共 錄

四六版特製美本全 紙數三百五十頁
定價金壹圓貳拾錢 郵稅內地八錢 支那朝鮮貳拾錢

好評沸出天下無比

批評一斑

◎東京朝日新聞曰く、折に觸れ時に應じ興來り情湧く毎にポツリポツリポロリポロリ飛び出したるもの即ち是れとこれ兎薯錄の名ある所以なり所謂和田垣一流の洒落狂歌を亂發し得意の英語を應用し詩歌俳諧を自由に雜へて意表外の落を取る等人をして覺えず哄笑を禁ずる能ざらしむ◎萬朝報、時に應じ折に觸れ二つ三つ宛飛び〳〵に讀んで見やうと思ひしに一氣呵成に讀んで了ひぬ著者が得意のウィットとユーモアの人を魅するものあればなり◎時事新報、博士の氣焰吐噴錄にして例の縱橫自在なる滑稽と皮肉はいかなる人をも噴飯せしめ感服せしめずんば止まず其豐富なる學識を遠慮なく吐噴する處博士ならでは見られぬ所也◎二六、酒脫滑稽顧を解くもあれば諷刺辛辣骨に徹するもあり就中英語棄兒行一篇は純文學として妙技神に入る近來の一大快著◎實業世界、收むる所百世篇悲く金玉の響きあらざるはなし博士例の輕妙洒脫飄逸奇拔奇想落天外の構想により噴出したるもの一讀再讀三讀尙且つ飽くを知らざらしむ兎に角如何のものにやと一度手にして先づ電車裡に之を讀む然るに我知らずフフンと噴き出して向側の乘客に怪しまるゝと屢也宅に持ち歸りて讀む又しても家人の怪しむ所となり遂に書中の說明を爲せば一時に笑聲起りてフフン所に非ずキヤツキヤと叫ぶ評者は腮を解き腹を抱へ又泣かされたり實に滑稽の奧に涙を藏し諧謔の底に人生の眞理を寓す世を啓發し人を誘導し無限の活敎訓を含む今古獨歩なり請ふ何人も一本を手にし賜へ……

◎大正出版界を震動せる破天荒の一大快著

發兌 東京石本日本橋區町三丁目 至誠堂 電話本局三六六一 振替東京一七四四

大正名著文庫

大町桂月先生著 ▲裝幀 川村清雄畫伯

第二編

人の運

四六判特製美本 紙數四百餘頁全
定價金壹圓貳拾錢 郵稅內地八錢 支那朝鮮貳拾錢

內容目次一斑

●運は運也運轉する也●獨斷の人を去つて果斷の人に來る●頑固の人を去つて自信ある人に來る●酒に溺るゝ人を去つて酒に狂はぬ人に來る●女に迷ふ人を去つて女に優しき人に來る●屁理窟云ふ人を去つて道理を解する人に來る●躁急の人を去つて勇往の人に來る●心の動く人を去つて才智の動く人に來る●己に寬大なる人を去つて人に寬大なる人に來る●自暴を起す人を去つて憤を發する人に來る●人を怨む人を去つて人を愛する人に來る●肩先の勇氣の人を去つて腹底の勇氣の人に來る●自ら侮る人を去つて分を守る人に來る●慾の多き人を去つて慾の大なる人に來る●傍觀する人を去つて奮鬪する人に來る●顧慮する人を去つて熟慮する人に來る●脈き易き人を去つて見切の善き人に來る●小事に拘泥する人を去つて小事を忽にせざる人に來る●人を恐るゝ人を去つて天を恐るゝ人に來る●過去を思ふ人を去つて現在を思ふ人に來る●現在を思ふ人を去つて未來を思ふ人に來る●餘論には人相陶宮九星八卦御圖判斷相性等在來世俗の凝視せる所をも洩さず警拔人の意表に出づ◎請ふ何人も一本を座右に備へて開運の眞理を自覺あれ

◎大日本茗溪會に於て普通敎育振興の爲め大正三年二月全國靑年の讀物として近來の傑作として審査選定せらる

發兌 東京石本市町 至誠堂 電話本局三六六一 振替東京一七四四

大正名著文庫

杉村楚人冠先生著　■口繪六大畫伯　六葉

第參編

へちまのかは

四六判特製美本
紙數四百五十頁
全一冊
定價壹圓廿錢
郵稅金八錢

本書は現文壇の重鎮楚人冠先生が廿餘年の心血を濺がれたる力作なり先生の文才氣煥發行く處として可ならざるなくキビキビと齒切よく覇氣稜々人を凌ぐの概あり然も行文流暢趣味深甚蓋し本書の如く個性のよく發揮せられたるもの天下其の比を見ず是れ先生一代の傑作集にして近來稀有の快著

世評一班

●時事新報曰く　著者貳十年間の波瀾ある生活を叙述せしもの氏の筆や斷じて他の模倣追隨を許さざるものあり獨得の調子と奇想天外の落想とは必ず讀者を魅し去つて已まざるべし

●萬朝報曰く　リアンの學生、講師、官吏、新聞記者、渡歐等約二十年間に亘る著者の實生活を描出したるもの著想奇警加ふるに新らしき圓熟せる筆致を以てす洵に趣味廣き楚人冠獨得の好著といふべく以て妙筆として「みゝずのたはこと」「兎糞錄」等に對せしむべし

●日本曰く　著者生來の機智と英文脈より來るユーモアとは遺憾なく窺ふを得べく何れも棄て難き小品計りである

好評續出

大日本茗溪會より本書を普通教育振興の爲め大正三年五月全國各學生及び青年の讀物として審査選定せらる

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話本局東三一六七　振替長京六六四四番

大正名著文庫

第四編

村上浪六先生著　▲口繪及裝幀　著者自畫自書

罵倒錄

四六判特製美本
紙數四百頁全一冊
定價金壹圓貳拾錢
郵稅內地金八錢
支那朝鮮各二十錢

世評一班

●實業之世界曰く、本書は大正名著文庫の第四編であつて其先出姉妹篇として既に和田垣博士の兎糞錄、大町桂月氏の人の運、杉村楚人冠氏の「へちまのかは」等を出して居る……▲其雄健にして圓轉滑脫せる工合なんどは凡筆とは決して云へないのである……▲本書は氏一流の筆鋒を鋭くして、片端から小氣味よく罵倒した社會觀人生觀浮世觀で其の世道人心を縱論橫議せる所、キビ〳〵として痛快を極めて居る……▲精勵刻苦の蟻が午睡を貪つて居る人間を罵倒する、春麗かな日、翩躚として戯むゝ雄蝶雌蝶が人間の戀は僞りであると罵倒する、上野の森に憩ふ鴉共が樹の下を通る氣障なハイカラに糞をひり掛けやうと相談する、其他色男の解說、嗅天下の解說江戸ッ兒と上方贅六等何れも輕妙なそして奇警な文學四十八項の多きに達して居る……▲讀み去り讀み來り、無量の興味が油然として湧出するのは流石に著者の老熟……

●二六新聞曰く、浪六氏の隨筆隨想錄なり飛ぶが如き筆を以て縱橫自在に人生の機微を擒縱したるもの揶揄あり皮肉あり滑稽あり諧謔あり面白きこと限りなく天下の珍書

◎浪六先生曰くあまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど實際是れが我輩近來に於ける快文字なりと！

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話本局東三一六七　振替長京六六四四番

大正名著文庫

第五編

法學博士 和田垣謙三先生著

吐雲錄

川村清雄畫伯
齋藤松洲畫伯 挿畫數葉

四六判特製美裝
紙數四百三十頁
定價金壹圓二十錢
郵税内地金八錢
支那、朝鮮、金二十錢

世評一斑

◉東京朝日曰く、著者前に兎糞錄を出して其滑稽突梯に人の頤を解かしめしが本書は之が姉妹篇とも見做すべきもの就中英語の酒落に至りてはまことに著者の獨得と云ふべし……

◉時事新報曰く、機智詼諧は其人の天才にして作らんとして作り得ず吐かんとして吐き得ずと雖も悉く是れ博士が博學に依つて得たる小說と雖も悉く是れ博士が博學に依つて得たるものの一に至大なる教訓を含み或は奇警なる以て江湖の第一人たるは已に世評あり況や學識の豐富多方面を加ふるに於て眞に鬼に金棒の觀あり本書は兎糞錄以後の藻を集めたる者諷刺警語例によつて秋霜よりも鋭く氣焰の五彩滿紙に燎爛何れにしても痛快淋漓三斗の溜飲一時に下るを覺ゆ……

◉中央新聞曰く、曩に兎糞錄を出して江湖讀書子をして熱狂せしめたる和田垣博士が例のノートを片つ端より摘出し得るに從つて輒めしもの本書なり如何なる短篇と雖も如何なる

◉大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十一月本書を全國中學上級生相當の讀物として審査撰定せらる

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長一三七 振替東京三六四四 六六四番

大正名著文庫

浪六先生著

第六編 第七編

元祿四十七士

■上編 下編全二冊

四六判特製美本
紙數各四百頁
定價 各金壹圓廿錢
郵税各 金八錢

そも〳〵勅使下向より筆を起して殿中の刃傷内頭頭の最後赤穗の開城一黨の苦心慘憺吉良家討入に到るまで の顚末を盡して其間に最も精確なる四十七士の列傳を加へ全編これ史實と趣味との結晶せるもの他に類を許さゞる浪六先生一流の痛快なる筆法は千古の忠肝義膽を描き出して餘蘊なし 正に是れ義士傳中の白眉

◉東京日日曰く、浪六氏は年來熱心なる義士崇拜家なるが、其の才筆を揮つて考證に流れず、小說に墮せざる眞に義士傳を平易に殺述せるもの最も義人の面目を傳ふる本書なり、浪六氏の男性的筆致は何度か古人を見て足はざらしむ、獨り義士傳を干ん讀者をして俯仰に堪ゆ武士道の精神に入るまで、▲二六日曰く、國民日曰く、血沸き肉躍らしむ、時事新報曰く、未だ曾て此の如き大作を見ざる者なり、▲大阪時事曰く、枯淡の筆致は能く義士の骨鳴り血躍るを覺ゆ

◉大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十一月本書を全國青年讀物の上乘として審査撰定せらる

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長一三七 振替東京三六四四 六六四番

大正名著文庫

第八編

文學博士 幸田露伴先生著

洗心錄

▲裝幀 川村清雄畫伯

四六判特製美裝
紙數 四百頁
定價壹圓廿錢
郵稅 內地八錢

世評一斑

●東京朝日曰く、露伴趣味を發揮せる隨筆的短編凡そ六十種を輯む風物に關する者修養に緣ある者史上の人物を評するもの畫を語る者文を談ずるもの悉く別天地の消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の俗塵を洗ふ清涼劑「洗心錄」の名得たりと謂ふべし……

●國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亙りて說を行るあり典雅清楚の文章誦すべし……

●時事新報曰く、評論あり史傳あり感想あり小品あり適く所として佳ならざるなきは露伴氏の才識也短劫の文幽玄の想兩々相映發して讀過蕭風自ら生ずるは露伴氏の風懷也日月浮生の外乾坤大醉の間に悠々自適して飄々たる白雲の如きものは露伴氏の趣味なり即ち說く所宏遠にして嵩高俗を語つて卑に落ちず讀み來つて一味清高の趣味油然として心下に湧起するを覺ゆ……

●東京毎日曰く、近時出版界稀有の名著として吾人は本書を一般讀書家に推薦す……

●學生曰く、樂地、苦境、以下五十七篇の小品に加ふるに、附錄三篇ある、露伴一流の氣の利いた、洗練せられた、實のある文章、立派な作文のお手本にもなる、青年諸君の讀物として最も好適してゐる……

◎萬朝報曰く、深玄幽妙なる人格の響を有するその想、字錬句烹無縫の天衣を思はしむるその文、隨筆家として眞に著者は當代に傑出す

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替東京一三七番 長局六四六番

新譯漢文叢書第三編

濱野知三郎先生註譯

新譯 孟子

本文新式ゴチック活字 附索引
袖珍三五形携帶至便

定價 金八拾錢
郵稅 金九拾錢

新譯漢文叢書第四編

大町桂月先生譯評

新譯 日本樂府

本文新式ゴシック活字
袖珍三五形携帶至便

定價 金五拾錢
郵稅 金六拾錢

孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄に其本文を掲げ卷末に五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直ちに其全文を求め得るの便に供したり其和譯の正當なる註譯の穩健にして平易なる殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なるは支那文學中推して第一位に置くべき者青年子弟の讀物として最も現代に適切の者就中著者の苦心と見るべきは索引の編纂と排列とに力を用ゐ此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりの愉快と

●讀賣新聞評 孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄に其本文を掲げ卷末に五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直ちに其全文を求め得るの便に供したり其和譯の正當なる註譯の穩健にして平易なる殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なるは支那文學中推して第一位に置くべき者青年子弟の讀物として最も現代に適切の者就中著者の苦心と見るべきは索引の編纂と排列とに力を用ゐ此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりの愉快と

●やまと新聞評 其文章は實に奔放自由を極めいつまでも生氣の潑溂たる不朽の天品世界の大文學書である……製本亦堅牢と

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯せられ、今又賴山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず、之を釋し之を評せらる、徹底の見、老熟の筆明快を極めて、渾然として桂月一流の名文となり、朗々誦すべく尊王の詩人、又愛國の詩人として古今に獨步せる賴翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ、以て日本歷史を知るべく、以て士氣を鼓舞すべし。日本男兒之を讀まば必ずや案を拍つて起たん

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替東京一三七番 本局六四六番 三六六番

新譯漢文叢書第五編

大町桂月先生譯評

新譯

日本政記

袖珍クロース
天金箱入美本

正郵 金八錢
價 金六拾錢
稅

賴山陽前に日本外史を著して武門の興廢を說き、後に日本政記を著して朝廷施政の大綱を明にせり。先年喧噪を極めたる南北朝問題の如きも翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手删して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大文章雄健、光芒陸離として實に史界の一大偉觀なり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤謬甚だ多し。大町桂月先生茲に之を飜譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨得の痛快なる警評を隨所に加へて筆力縱横、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず。

新譯漢文叢書第六編

久保天隨先生譯評

新譯

十八史略

袖珍總クロース
天金箱入美本

正郵 金八錢
價 金六拾錢
稅

上下五千年、興亡八十餘朝、この間治亂成敗の跡、必ず其始終を審にし、紀述その要を得、簡明切當、記誦に便なるものを十八史略となす。その書、從來世に行はれ、今に至りて廢せざるもの、豈に偶然ならむや。本書は譯者が特に意を用ゐて、之を時文に飜せしものにして現代國語の文法に循從し、且つ漢文に特殊なる語勢の緩急を併せ移し、難解の字句には、すべて注脚を施したれば、讀者は熟路に就いて輕車を驅るが如く、容易に、全篇を通覽するを得べく、卷中に挿入せし數百條の評語は、寄警峭拔その史實と相待つて、覺えず案を拍つて快哉を呼ばしむ。加之、篇首には、精細なる解題を載せ、卷末には便利なる新式の索引を添ふ。されば、この書を讀むもの、一は以て容易に東亞ツラン人種の起伏消長を審にするを得べく、一は以て漢籍攻究の指針となすべく、その裨益、もとより少々ならず、敢て江湖の一讀を勸む。

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替本局三六七一 東京六四番

新譯漢文叢書第七編

友田宜剛先生評解

新譯評解

續文章軌範

本文新式ゴジック活字
袖珍三五形携帶至便

全七冊
縮刷全壹冊

正郵 壹八錢
價 金金
稅

續文章軌範は、正文軌範と相待ちて、古今作文書の雙璧、古人が心血を濺ぎたる千古の名文、陸離として光彩を放てり。文に志す者は必ず之を坐右に致して日夕に師とし友とすべし。作文教授の泰斗友田宜剛先生は、刻苦研鑽多年の蘊蓄を積みて之を完全なる明治の作文模範化せられたり。今其特長を一言せんか、從來漢文讀方の通弊たる文法の誤に深く注意し本文は新式ゴジック振假名付にして難解の字には懇切なる解釋を施し、各文の始めには作者の略傳を附し篇末には文法と論評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法より切實に作文法を教へ、上欄には原文を掲げて對讀に便ず。要するに文章界は本書を得て更に五百燭光を掲げたり。正續彼此相侍つて日月を並べ懸けたるが如し。冀はくは江湖の諸彥一書を坐右に備へ給へ。

新譯漢文叢書第八編

大町桂月先生譯評

新譯

國史略

袖珍總クロース
天金箱入美本

全五冊
縮刷全壹冊

正郵 壹金八錢
價 金拾錢
稅

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の尊き所以を知らず三千年金甌無缺の歷史の實質を知らず人心輕兆となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せむとするは今の世の大患なり世の歷史教科書は唯歷史の骨組のみありて肉なし血なし歷史教育の宜しきを得ざる其大原因ならずんばあらず大町桂月先生茲に慨する所ありて先に日本外史日本政記日本樂府を譯され今又國史略を譯さる國史略は古來の諸國史の粹を拔き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を閑闘に創めて篇を聚樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とするに足る二十年前迄は戸々に誦せられたるにも拘らず漢學教育衰へて此の名著も空しく閑却されんとす今大町先生之を譯し之を解し之を評して有益なる貴重なる國史略茲に復活す

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替本局三六七一 東京六四番

新譯漢文叢書第九編拾編

久保天隨先生譯補

新譯 水滸全傳

上下全二冊

袖珍クロース
天金箱入美本

上郵 下郵 正價 各税 各金 壹金 圓壹 貳拾 八錢

水滸傳は實に支那小說中の隨一たり唯憾むらくは未だ好譯本を得ず坊間流布の書は馬琴僅に筆を十一回に絶ちて十中の九は高井蘭山が岡島冠山舊譯の錯誤脫漏を踏襲せるのみ壹日本文壇の一大恥辱に非ずや我天隨先生深く之を慨し拮据數年玆に譯本新に成る先生が支那小說に造詣深きは世既に定評あり其譯文の妥當にして流麗暢達なる固より辯を俟たず波瀾萬丈骨鳴り血湧くの快文字は本書に依りて其眞骨頭を傳ふるを得ん

新譯漢文叢書第拾壹編

大町桂月先生譯解

新譯 論語

全拾壹冊
全縮刷

袖珍クロース
天金箱入美本

定價 郵稅 金壹圓 金八錢 拾錢

孔子は世界三聖の一也論語は孔子の遺訓也東洋思想の本系也日本道德の教典也論語を解せずば東洋を解すべからず論語我國に入りて既に二千年我國民は能く之を咀嚼し之を活用せり孔子の敎は本國に行はれずして却つて日本に行はれたる觀あり然るに世には所謂(論語讀みの論語知らず)なる者少なからず道德の根蔕に古今なし唯風俗人情時勢の異動を察して論語の眞意を解するに非ざれば折角の經典も死物となり害物となる論語を解くには活眼を要す大町桂月先生心血を濺ぐこと二年有半絶代の快筆を揮ひて活眼を以て活書を心解し玆に新譯論語成る譯するのみならず之を詳解せり先生の眼識筆力相俟ちて三千年來の經典新に明治の世に活躍す

◉發兌 至誠堂 東京市本石町 電話振替東京一三六七 本局 六六四六番

新譯漢文叢書第十二編十三編

久保天隨先生譯補

新譯 演義三國志

上卷 壹千頁
下卷 壹千頁

縮刷全二冊

上郵 下郵 正價 各税 各金 壹金 圓壹 貳拾 八錢

▲支那小說中の隨一▼

三國志は支那小說の隨一たり 蜀魏吳天下を三分し 一代の英俊豪傑亦玆に集り 智を爭ひ勇を鬪はす 實に天下戰亂の一大奇局たり支那文學に造詣深き 天隨先生新に流暢なる快筆を揮ひ 險澁なる原書を譯して面目を一新す卷を繙けば 髣髴として刀戟相摩するの聲を聞くが如く光焰萬丈血躍り腕鳴る必ずや案を拍つて起たん

▲軍國男子必讀の快著▼

新譯漢文叢書第十四編

濱野知三郎先生譯解

新譯 大學中庸

縮刷全一冊

袖珍天金總クロース
特製箱入頗美本

正郵 價稅 金六拾錢 金六錢

大學は儒學の原理を說明し中庸は孔門傳授の心法を述ぶ共に千古不磨の經典たり本書は何人にも分り易きを主とし本文に訓點を附け更に總振假名の讀方を示し次に懇切なる註釋を施し本文は新式ゴジック活字を用ゐ上欄には原文を掲げて對讀に便す

◉發兌 至誠堂 東京市本石町 電話振替東京一三六七 本局 六六四六番

熊田葦城先生著　川村清雄畫伯裝幀　寫眞百數十個挿入

日本史蹟 **大阪陣** 冬陣 夏陣

菊判特製金文字入 全二册紙數各五百頁

定價各金貳圓　特價各金壹圓六拾錢

郵税（内地各金十二錢 清朝各金三十錢）

當代獨得の地理的活歴史

徳川家康が難攻不落の大阪城を陷るゝや計畫慘憺を極め作戰苦心を盡す今古此辛辣の戰なく東西此の悲慘の史なし本編は地理と歴史とを融和する熊田先生獨特の快筆を揮つて其終始曲折を描寫す老雄の面目生動し勇將猛士の苦衷活躍す殊に一々地理を精査して正確なる史實を湊合す三百年前の活歴史たると共に大阪に遊ぶものゝ必携必讀の好案内記

●夏期第一最適の良書●

大町桂月先生著

（定價金八十錢）

箱根山

三五形特製寫眞數十個入 美本全一册携帶至便

●避暑溫泉の最好案内書●

日本第一の溫泉場と云へば何人も先づ指を箱根山に屈すべしまた日本第一の自然的大公園と云へば何人も先づ箱根山に屈すべし而して日本第一の紀行文家と云へば何人も先づ指を大町桂月先生を中心とせる七八里四箱根山へ遊ぶこと前後數十回蘆湖は言ふも更なり熱海湯河原伊豆山の舊き七湯の新しき溫泉場の諸處二子駒ヶ嶽金時明神明星三國山の諸峰の所謂八里の古道なる箱根三島伊豆山三權現道了尊早雲等古祠の名寺の内なる處先生の足跡隈なく其獨得の紀行文に神逝かむとして漏さず裝幀の堅牢にして輕便なるも亦破天荒なり

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替東京一三六六番　局長六四七四番

杉村楚人冠先生著

縮刷合本

大英游記

半球周遊

口繪六大畫伯六葉

袖珍特製天金箱入美裝

紙數八百頁全一册

定價金壹圓參拾錢

郵税金八錢

新式ポイント活字印刷

携帶至便

徳富蘇峰先生

の評に曰く杉村君は英語に達者にして英文に通ず歐人は坐ながら名所を知る如く君は坐ながら歐洲の事物に通ず斯人にして筆を載せて歐洲に遊ぶ眞に是れ鬼に金棒。又曰く著者は名詮自證其の筆端眞に縱横也筆を使ふ舌を使ふが如く舌も尙及ばざるの概あり俊利哀梨を喫する如く冷刺骨を透すと

前年本書の一たび世に出づるや好評嘖々爲に洛陽の紙價を高からしめしが今回合本縮刷の上裝幀を新にし訂正を施し以て再び此に江湖に見ゆ先生の犀利なる觀察眼と精緻なる筆致とは讀者の眼前に趣味津々たる世界の一大縮寫圖を展開して坐ながら異國の風物に接するの感あらしむ

帝國大學教授法學博士
和田垣謙三先生著

○青年諸君

增訂改版廿壹版　四六版特製

定價金一圓八錢　郵稅金八錢

世評一斑

國民新聞曰く、著者の滑稽と妙文とは世の知る所……口を銜いて出る滑稽の罰轉滑脫と智識の該博にして論旨の意表に出る處殆んど敵手無し奇書の一と云ふを憚らず▲中外英字新聞曰く、樂天家にも厭世家にも均しく好伴侶として歡迎せらるべきを信ず思想の豐富なると活氣の横溢するとに於て博士の文は確かに當代に冠絶す

帝國大學教授法學博士
和田垣謙三先生著

○世界商業史要

菊判總クロース特製

定價金一圓十二錢　郵稅金十二錢

本書は太古以來三千年に亘れる世界商業の盛衰を叙し最近英米獨の諸邦覇を太平洋上に爭ふの壯觀に及ぶ惟ふに商業史は一面に於て文明史也政治史也古今列國興亡の跡を訪ね世界通商の發達を叙するに於て博引旁證叙事明快本書は博士が獨壇の勝場を示して餘蘊なし本書は公私商業學校生の好參考書たるのみならず苟くも世界の大勢に通ぜんと欲する者に取りては必携必讀の良書なり

皇太子殿下上覽の光榮を賜ふ
和田垣博士中谷無涯兩先生著

○戊申詔書奉體歌

訂正八版

定價金五錢　郵稅金五錢

明治十四年文部省檢定
二十二年二日濟

此唱歌は戊申詔書の聖旨を奉體して分りせんとするもの、朝な夕なに口吟まれなる易く曲面白く小學生徒の方々の諷誦に供ば畏き御心の程推し奉られて限りなき聖德に浴するの思あるべし萬民必讀の國民的唱歌として江湖の諸賢に薦む

東儀鐵笛先生
東京音學會作曲

○處世訓話餅

和田垣博士戲著
川村壽伯艸畫　（三版）

定價廿金五錢　郵稅金四錢

中外英字新聞評語

腹ふくらす所の所謂餅の餅にあらざる（モチ）の種類各種を（長持）にも納め切れぬ程澤山（モチ）出したる處先づ讀者の度胸を拔くそれより人生最大の要點なる氣持心持を論じ心は不可思議なるものとの題下に此靈妙不可思議なる心の作用を說く小册子ながら滑稽諧謔の裡に含蓄する眞理教訓は他の萬卷の修身訓話に優る

部數取纏め御注文の節は割引可仕候

袖珍美本

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替本局三六七一　東京六六四四番

陸軍大學教授友田宜剛先生著

○中等教育作文自習寶鑑

四六版總クロース紙數六百餘頁

定價金二圓十八錢　郵稅金一圓八錢

文學博士細川男爵閣下題詞
濱野知三郎先生編

○ポケット大學中庸註釋

附載　學庸索引　王陽明大學古本　學庸注釋目次

定價五十五錢　郵稅形金五錢　携帶十五錢　郵便至五六錢

東宮侍講三島博士題詩
竹中信以先生註釋

○ポケット孝經講話

附錄　愛吟集

三五形美本携帶至便

定價金三十五錢　郵稅金五錢

鐵道總院裁床次竹二郎先生述

○歐米小感

四六判特製

定價金七拾八錢　郵稅金一圓　郵便一評

世評一斑

本書は列國文明の源泉たる信念と信仰心とに着目して我邦同胞の頭上に最も適切なる警策を加へたるもの讀一讀必ず啓發する所多かるべし

德富蘇峰氏評に曰く、觀察は更に空谷跫音の感あり

山路愛山氏曰く、我等は一々首肯し同感して卒讀す田尻男の文章と共に役人著述中の双璧とすべし（其他好評續出）

作文の友田先生は作文研究のために粉骨碎身す宜なり十年の研鑽天下に其光芒を放てると本書は先生が特に熱血を濺がれたるの傑作なり着想新奇拔着實實用趣味高雅一として兼ね備はらざるなく第一編文話第二編普通文第三編書簡文第四編文法要略第五編美辭一斑第六編韻文及び鑑頭等何れも先生が緻密精細なる頭腦と丁寧懇切なる實驗教育の結果より得來れる者啻に作文に於ける數十萬の學生諸君が自習寶鑑たるのみならず實に滿天下諸彦が作文の寶鑑なり

◉讀賣新聞評　ポケット論語の流行は今や殆んど其の絕頂に達す然も孔子の道を知らんと欲するものは尙「大學」の門よりいりて「中庸」の奧を極めざる可らず著者此に見る所あり曩にポケット論語を著したる例に倣ひ今又學庸二書を取りて原文並に其讀方釋義を揭げ上欄に於ては別に字義參照等を載せ更に五十音順に依りて詳細なる索引及び大學の部に王陽明の定本に係れる古本大學を付したる等頗る用意の周到を見るに足る古本の研究が人格の修養に大に功あるは云ふに及ばず常に是等の書を懷中にせば必ずや過ちを少なうするを得んか

孝經は人倫の大本を說きたる唯一無二の經典にして歷朝之を奬勵し戶毎に一本を備へしむべき詔勅を下されたることあり其書の尊重すべき復喋喋を要せず此書は本文と總假名付の譯文とを揭げ次に平易流暢の談話體を以て丁寧懇切に講述したるもの漢文學復興の今日苟くも人倫の根原を知らんと欲する者は何人も之を讀め裝釘優美定價至廉敢て滿天下の靑年子弟諸君に薦む

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替本局三六七一　東京六六四四番

澁澤男爵閣下序　川村畫伯表裝幀
新渡戸博士序
蘆川忠雄先生著

○愛子教養　父の書簡

菊版總クロース美裝

定價金一圓二十錢　郵稅金二十錢

内容概目

第一信、品性の偉大なる勢力、第二常識の修養、第三日常談話の要訣、第四書簡の認め方、第五筆蹟の疎放を誡む、第六金錢使用法、第七生活容儀の整理、第八世態人情の機微、第九圓熟の作法、第十奮闘の効果、第十一樂天思想の眞價、第十二休養の重大、第十三生活の眞意、第十四實務處理の眞髓、第十五健全なる意志の修養、第十六人生の幸福に達する道

蘆川忠雄先生補譯

○交際規範　なかれ

袖珍美本　ダイヤモンド

定價金四十五錢　郵稅金壹錢

「なかれ」は日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗錬的文章を以て記述したれば此の書を伴侶とせば交際上の失敗を避くべし

「なかれ」は大人が讀んでも有益なるのみならず青年學生及び婦女子が讀んでも眞に缺くべからざる教訓を學ぶべきは疑なし

「なかれ」は洋食の食べ方洋服着用の注意交際談話法に至るまで斬新なる二十世紀のスタイルを欲する紳士淑女の良師友なり

「なかれ」は日明の紳士淑女に必要なる作法品性風采を說くが故に流行の紳士と田夫の差は「なかれ」を讀むと否とにて定るなり

「なかれ」は最新式の意匠を凝らせるポケット携帶の袖珍美本なれば汽車電車の中にて暇ある毎に通讀せば其利益は計り難し

蘆川忠雄先生著

○交際と應對

菊版上製全一冊

定價金五十錢　郵稅金六錢

學問伎倆共に勝れながら處世上失敗するは交際應對の拙劣に因るのみ本書は著者が多年の實驗に徵して青年諸君のために交際應對の根本を提へて頓才を發揮する工夫快活心の表示人情に投ずるの呼吸愛嬌をなすの用意人心看破の道等十五章に分ちて精細に說明せるものにて此一冊を熟讀して活用せば他人の感情を害し交際と應對とに於て失敗することなきが故に處世上の成功者たらんと者は必ず再讀すべし

蘆川忠雄先生著

○談話術修養

菊版特製全一冊

定價金壹圓　郵稅金拾壹錢

本書は著者獨特の創見に基き其輕妙流暢なる才筆を呵して談話に關する有ゆる注意及び談話術の要訣を說明せるものにして加ふるに著者博學多識なる歐米最新の流行なる斯術の話法を加味折衷して錦上花を添へたり人生成敗の基く所なる斯術の計畫察にあらずして却て尤も卑近と見做したる談話に因るを思へば斯術の完備を計るは一生の大事たるを知るべし本書は此重大の談話修養に關する唯一のオーソリチーにして幸福成功の福音は此一卷を活用するに因りて必ず期すべきなり速に一讀せられよ

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替本局三一六七四四番

蘆川忠雄先生著

○修養と人物

菊版特製　全一冊

定價金壹圓　郵稅金拾壹錢

是れ著者獨特の人物養成論也修養を積んで怠らずんば何人も有爲の人物たるに至るべしとの見地よりして現今青年の尤も要求する所を擧げ或は其缺陷とせる所に突進して之を敎示し精神的飢渴を滿たさしめ其明快の筆法を以て縱横無盡に論破せられたるものにして全篇雄大豪宕の氣滿ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志ある青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著

○勤儉の實踐

菊判　全一冊

定價金六十五錢　郵稅金六錢

奢侈輕佻の風一世を風靡し人々虛榮に耽り上下競うて此惡弊に醉ふは今代社會の一大缺陷にあらずや著者深く之を慨し其痛快大の筆を揮つて愼重の態度懇切の用意を以て世人に一大警告を與ふ其勤儉を說き貯蓄を唱ふる見識は世上の陳腐なる勤儉論とは全然選を異にし最も文明的見地の上より之を道破して一々剴切一度本書を取つて之を熟讀せば奢侈浪費の徒も飜然として其非を悔ひ勤儉力行の念勃々として起るべし

蘆川忠雄先生著

○時間の經濟

菊判　全一冊

定價金六十五錢　郵稅金六錢

文明の進歩と社會の發達に從ひ生存競爭は益々激甚となり其生存競爭の最大根柢となるは金錢と時間の二者也世人金錢に至りては之に注意する敏なりと雖も時間の經濟に至りては其重大なるを知りながら之を實踐する者少し著者其明快緻密の頭腦より歐米最近の傾向に基き巧妙適切の時間經濟を案出し本書に於て詳細に之を說き迹を說き苟も時間を活用して競爭場裡に立たんとする青年諸君は本書に因て其精確機敏の智識を求めざる可からず

蘆川忠雄先生著

○修養座右錄

袖珍美本

定價金六十錢　郵稅金六錢

從來發刊せし修養書の多くは千篇一律にて舊套を模倣せるに過ぎず隨て今日の生存競爭時代に應用する能はず獨り本書は此種の著書中にて斬新に尤も奇拔の見地より現代青年の必須なる日常處世の心得大膽周到の態度經濟的觀念等哲人の大悟せる大達觀より痛快の斷案を下したるものにして卷末には名家座右訓を付したる等用意周密一讀意氣伸暢なる處世訓を學び得らるゝもの天下に其比なかるべし

◉發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替本局三一六七四四番

小松原前文部大臣閣下題字
樂翁公眞筆（五版）
定郵價金壹圓拾貳錢

○天覽 白河樂翁 前編
碧瑠璃園著 齊藤松洲畫伯裝幀

平田前内務大臣閣下題字
樂翁公眞筆（再版）
定郵價金壹圓拾貳錢

○天覽 白河樂翁 後編
碧瑠璃園著 齊藤松洲畫伯裝幀 川村清雄畫伯裝幀

前宮内大臣土方久元伯題字
樞密顧問官黑田清綱子題字
定郵價各金壹圓拾貳錢

○史傳小說 高山彦九郎（前編）（後編）
碧瑠璃園著川村清伯裝幀

定郵價金壹圓拾貳錢

番衆浪人著 梶田半古畫伯口繪 齊藤松洲畫伯裝幀
定郵價金壹圓拾貳錢

○史傳小說 後藤又兵衛
菊判特製紙數四百五十餘頁

世評一斑

東京朝日曰く、儉約、力行、慈悲、正義の權化たるかを疑はしむる樂翁公生涯の面目は神彩ある筆端に奕々として現はる家庭の讀物として生ける教訓を與ふべく其の華胄の人たりしために華族の子弟に讀ませて大なる感化あるべし裝釘の艶美なる事近來の隨一也

讀賣曰く、家庭に於ける歷史的讀物として上乘の第一なるべし

實業之世界評・裝幀の美を以て出版界を驚かしたる忠孝小說叢書白河樂翁……前篇後篇と併せて社會の歡迎を受くる事疑なし現時の文壇一方に平民文學興起の傾向あれば一方に斯くの如き貴族的權力者の文學漸く流をなさんとす注目すべき現象と云ふ可し▲新小說曰く、家庭に於ける婦女の團欒にも男子が一夕の讀物としても吾人は如是の小說を大方に薦む

世評一斑

王政復古の主唱者亦忠孝節義の權化たる高山彦九郎が一代の事業、人格、勤王の眞面目は現代第一流の史傳小說家碧瑠璃園先生が獨特の妙筆に依りて活躍す、もし夫れ彼が最後の悲劇に至りては讀むもの必ず肉動き靈戰くの概あらん

一代の豪華を極めし桃山の春は夢の如く消えて天下盡く其舊恩を捨て強者たる關東の旗下に阿諛するの時其の最後の結果を豫期しつゝも弱者たる豐家を佐けて士道に殉じたる後藤又兵衛が千變萬化其半生の大活劇は捕へて本書中にあり爽絶快絶情夫をして起たしむ

◉發兌 至誠堂 東京市本石町 電話振替東京局三一六七六六四番

皇后宮御歌
宮中御歌所主事坂正臣先生題字
東京麟祥院什寶寫眞數葉入
土方伯爵謹書
定郵價金壹圓拾貳錢

○第壹家庭讀本 春日局
碧瑠璃園著 紙數四百餘頁（菊版特製美本）
川村清伯裝幀

春日局は千代田城大奥の創始者として又大奥政治の開發者也局が三代將軍の乳人として上りたる前後の事情は從來の小說傳記にも記されたれど幼時の艱難稻葉佐渡守を良人とせる事情三人の實母として子と實子との間に挿まりて苦辛艱難せる局に至りては未だ何人の筆にも上りたる事なし著者茲に見る處ありて局の幼時中年時を詳記し延て晩年時に及ぶ筆致圓熟事情明白家庭の讀物として最も趣味と教訓とに富むもの也

碧瑠璃園著
川村清雄畫伯裝幀
定郵價金壹圓拾貳錢

○第貳家庭讀本 大石陸女
紙數四百餘頁 菊版上製美本

義士快擧の裏面史として見る可きものは本書あるのみ夫れ陸女は絶世の忠臣良雄の妻として夫以上の辛酸を嘗めて其事業を成就せしめし者著者燃犀なる眼は早く此點に着眼してよく烈婦が一代の事蹟を縱横に描寫す以て永く婦人の龜鑑とするに足る好小說なり

小松原文部大臣閣下題字
簑笠翁著 齊藤畫伯裝幀
定郵價金壹圓拾貳錢

○偉人小說 水戸光圀
菊版特製全一冊

光圀卿は德川時代有數の偉人にして勤王家也著者は馬琴の別號たる簑笠翁を自稱せる當代有數の文學家の匿名也其流麗なる詞藻と高雅なる對話との間に知らず識らず光圀卿の人格事蹟を了解せしめて千載の下尚此偉人を偲びて轉た欽慕の情に堪へざるものあり本書の特色は其高潔にして健全なる趣味の流露に存すれば家庭の讀物としては勿論廣く社會青年男女の讀物としても良く教訓と趣味とを感得せしむる事他に比なし

大町桂月先生序
原鼓朗先生著
定郵價金四金拾六錢

○蒲生氏鄉
四六判 全一冊

大町桂月氏序して曰く「才氣縱横逸氣奔放凡人をして氣昂り情熱せしむ」と著者が滿腔の磊塊蒲生氏鄉なる一英雄を執へ來りて縱横論評文辭燦爛として痛快を極む偉人若くは偉人たらん者は必ず此書に啐喙して其翻山倒海の手腕を伸ぶるを要す

◉發兌 至誠堂 東京市本石町 電話振替東京局三一六七六六四番

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

全四十五冊
定價各冊錢
郵送各四錢

袖珍特製
舶來紙刷
携帶至便

既刊書目

14 義經記全	13 先哲叢談全	12 益軒十訓中	11 日本外史中	10 常山紀談上	9 心學道話全	8 太平記壹	7 源平盛衰記壹	6 西遊記上	5 曾我物語全	4 謠曲全集上	3 益軒十訓上	2 日本外史上	1 南朝史傳全
28 四書全	27 禪學名著集全	26 續心學道話全	25 日本外史下	24 大阪政談上	23 太閤記壹	22 狂言記全	21 百人一首一夕話全	20 西遊記下	19 謠曲全集中	18 源平盛衰記貳	17 益軒十訓下	16 常山紀談中	15 一休諸國物語全
以下殆手中	41 太平記終	40 太平記四	39 太閤記五	38 太平記三	37 太閤記四	36 謠曲全集下	35 太閤記參	34 源平盛衰記五	33 太平記貳	32 源平盛衰記四	31 太閤記貳	30 源平盛衰記參	29 常山紀談下

東京市日本橋區本石町三丁目
發兌　至誠堂
振替東京一七四四

360
8